花伝書別紙口伝

二　細かなる口伝

一、細かなる口伝に曰く、音曲・舞い・働き・振り・風情、是又同心なり。これ、いつもの風情・音曲なれば、左様にぞ有らんずらんと、人の思い慣れたる所を、さのみに住せずして、

〔口訳〕細部に亙る口伝に、「音曲・舞・働・振・風情、これ亦同じ心なり」といふのがある。これは、見物人の方で、いつもの風情（動作）や音曲だから、今度も従前通りの演出だらうと思ひ馴れて居る所へ、さういつもの通りにやらないで、同じ振でありながらも、演者の心に、以前よりは軽々と風体を嗜んで演ずるやうにするとか、又従前と同じ音曲であつても、尚一層に工夫を凝らして、曲を彩り声色を嗜んでうたひ、演者自分の心にも、今度ほどに一心にやることは無いといふ程に大事に

心根に、同じ振りながら、元よりは、軽々と、風体を嗜み、いつもの音曲なれども、尚故実を廻らして、曲を彩り、声色を嗜みて、我が心にも、今程に、執する事無しと、大事にして、こ

して演じたならば、見物人から、いつもよりも尚一層に面白いなどといふ讃辞をうける事がある。これは結局、見物人に取つて、珍らしい感じが起る為に外ならないと思ふ。

の態をすれば、見聞く人、常よりも尚面白しなど、批判に会ふこと有り。これは、見聞く人の為、珍しき心にあらずや。

然れば、同じ、音曲、風情を為るとも、上手の為た

かやうなわけであるから、同じ音曲をうたひ同じ風情をしても、上手な役者の演じたものは格別に面白いであ

らんは、別に面白かるべし。下手は、もとより習い覚えつる節博士の分なれば、珍しき思ひ無し。上手と申すは、をなじ節・懸かりなれども、曲を心得たり。曲と云うは、節の上の花なり。

らう。下手が演じては、習ひ覚えた節博士の通りにやるのだから、一向に珍らしいといふ感じは出て来ない。上手といふ者になると、同じ節であり同じ風情でありながら、曲といふものを心得てゐる。曲といふのは、節の上に於ける花をいふのである。同じ上手、同じ花の中でも、無上の公案を究めた者は、尚その上に花を知るであらう。大体、音曲に於て、節は定まつた型であり、曲となると上手のみ出し得るものである。又、舞に於ても、舞の手は定まつた型であり、その風趣風韻といふ

同じ上手・同じ花の中にても、無上の公案を究めたらんは、尚且つ、花を知るべし。凡そ、音曲にも、節は定まれる型木、曲は上手のもの也。舞いにも、手は、習へる型木、品懸かりは、

ものは、上手にしてはじめて出し得るものであるのだ。

上手（ず）のものなり。

〔評〕 前段に於て、一般的に能の花を概論し、この段に於ては、花は能一番にあるばかりでなく、音曲にも舞や働にも、振や風情にも存するものであることを説いて居る。音曲の節や舞はたらき等の手は、いはば型木である。それは何人がうたひ何人が舞ふも、大体一定の型が定まつて居る。例へば序の舞の型とか、龍神のはたらきとかの如きである。又物真似の型とても大体一定したものであつて、さう無暗な動きは許されない。又これを演者個人にとつて見ても、一年前の舞や音曲と、一年後のそれとに、節や型に相違があらうとは思はれない。従つて、一定した節や型通りではさして珍らしさや面白さはなくなる。そこに、花を咲かすには如何にすべきかといふことが問題となる。即ち音曲に於ては、節（ふし）以上の曲（きよく）が花であり、舞に於ては手（て）以上の品（しな）かゝりが花である。そこに着目して、上手が演ずる時に、花が咲くといふのである。曲については後に著された五音曲条々の中に、

曲をば習はぬ道あり。其故は、曲といふべきものは、まことには無きも

のなり。若ありと云は、それは只節、なるべし。さるほどに相伝すべきかた木もなし、是は以前の下地の仕声より、節習、横竪、相音、如レ此の条々を能々究めて、達者能一の安位にすわりて、をのづから出たる用音の花（はな）匂（にほひ）を曲とは云也。

と述べた条がある。自然に生れる花であり匂ひであるといふのである。舞のかかりといふも同様で、上手は型通りに演じてゐても、そこに、風韻があり風趣がある。これはただ感じ得るだけで、その正体を捕捉することは出来ない。これが舞の花であるのである。捕捉し得る所はただ

型だけである。

我々が現在の能を見る際にも、上手名人と評せられる人の芸を見ると、この花を実際に感じ得る。上手も下手も、その型や舞の手に変りはない。しかるに、下手の能にはうるほひがなく、味もなく匂ひも無い。上手になると、一つの動きにも一つの謡にも、何とも名状し得ない深い味がある。これは上手の芸にあらはれた花だと考へて良いであらう。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著